

午前7時、東京大学生産技術研究所で生物物理工学を研究する杉原加織准教授の1日が始まる。小学生の長女を送り出し、次女を車で保育園に預けた後、大学に到着するのは午前10時前だ。研究の申請書類の作成、企業との面談、学生との議論などをこなし午

女性の活躍で研究力向上



学生と議論する東京大学生産技術研究所の杉原加織准教授

後7時ごろ退勤する。夜や土日は家族と過ごす。博士課程はスイスで学んだ。スイスの大学で助教の職に就いたタイミングで2人の娘を出産した。欧州では子育てをしながら活躍するたぐさんの

低い割合 環境整備で改善

「研究者は比較的自由が大きい。夫の協力も不可欠だが、両立しやすい職業なのは」と話す。杉原准教授のように活躍する女性研究者の割合は海外に比べて低い。22年時点で17・8%と主要国で最低水準だ。日本ではなぜ科学の道に進む女性が少ないのか。従来の研究者像は日夜研究に没頭し、育児などと両立できないイメージがなかった。女性には理系に向かないという偏見もあった。内閣府の調査では「女性に理系の進路は向いていない」と、直接言われたり聞いたたりした経験がある女性の割合は6%、「言動や態度からそう感じたことがある」と答えた女性は13%だった。東大の大島まり教授は

「理系志望の中でも理工系が増えている」と指摘する。資格がとれる医薬と比べ、理工学は免許資格が少ない。結婚や出産、夫の転勤で仕事を辞める方も少なくない。シンガポールの科学誌が優れた研究者を発表する「アジアの科学者100人」の23年版に日本人12人が選ばれ、9人が女性だった。女性の科学者を増やすには、思い切った策が必要だ。理科系の学部に入る大学が相次ぐ。今春の入試で10大学を超えた。4月、東京工業大学には総合型・学校推薦型選抜に設けた「女子枠」で合格した56人が入学した。一般入試と合わせると女子の新入生は164人と全体の15%（前年は11%）に向上した。25年度

加盟国の平均得点、日本の平均得点で男女の差はほぼなかった。国際的に高い評価を受ける研究者の入り口となる学生を増やし、研究の道に進みやすい環境の整備が必要になる。米テキサス大学オースティン校の鳥居啓子教授は「女性が発揮できるような制度の整備や女性研究者に対する偏見の払拭が必要だ」と強調する。東大のなかで女性比率が最も低い工学系研究科では、23年に教員の育休取得率100%を目指す施策を打ち出した。24年度から生理用品の配布を本格的に始め、授乳などができる休養室も導入する。女性研究者が活躍できる環境が、日本の科学技術の浮沈を左右する。